

第6章 動物の意識とその主体性 2. 心理学的考察

生物界の秩序と生物観

予備役の陸軍工兵少尉であったことから、遠からず召集されて戦死する可能性に思いを致すようになった今西錦司は、日中戦争が泥沼化していた、太平洋戦争突入の前年に当たる1940年に、今なお名著の誉れが高い『生物の世界』（1941年、弘文堂書房）を、急遽、遺書として執筆し、友人の哲学者、下村寅太郎を介してそれを上梓した。今西に魅かれて弟子となる者の多くは、生物学者としての自らの姿が「自画像」として描き出されたこの著書を通じて今西と出会ったのである。

今西は、その第一章（「相似と相異」）を、船とその船客という比喻で始めている。そして、生物界が一定の構造や秩序を内包していることを説明する中で、それまでの経験によって培われた、今西独自の生物観を提示する。この世界は、実にさまざまなものから成り立つ、いわば寄り合い所帯のようなものであるが、それは互いに無関係に寄り集まったのではなく、それなりの秩序をもっている。加えて、その船客たちが外から来たものでなければ、最初からその船に乗り合わせていたと考える以外にない。

いひ換へるならばそれらの船客はみな、船の中で生れたものと考へるより他ないのである。〔中略〕

地球といふ一大豪華船に船客を満載してあるといふのは、現在の地球のことであつて、その船客が他から乗り込んできたのでないのと同じように、この豪華船の建造に要した材料もまた他から持ち運んできたものではないのである。地球が太陽から分離して、それが太陽に照らされながら太陽の周囲を廻つてゐるうちに、それ自身がいつのまにか乗客を満載した、今日みるような一大豪華船となつたといふのであるから、全く

信じ切れないようなことであるに相違ない。〔中略〕

地球自身の生長過程において、そのある部分は船の材料となり、船となつていった。残りの部分はその船に乗る船客となつていった。だから船がさきでも船客がさきでもない。船も船客も元來一つのものが分化したのである。それも無意味に分化したのではない。船は船客をのせんがために船となつたのであり、船客は船に乗らんがために船客となつていったといふことは、船客のない船や、船のない船客の考へられないことからの當然の歸結である。(今西, 1941年, 2-4ページ)

生命の誕生は、偶然の所産ではなく、必然的な帰結であるという。これこそが、今西の生物観および自然観の原点と言うべきものであろう。通常の生物観は、環境が先在することを自明の大前提として構築される。それは、生命の通史からすれば、ふしぎなことではない。生命の発生は、地球が誕生してから数億年後とされているからである。ところが、今西は、両者が不即不離の関係にあると考える。環境と生物とが対立関係にあることを当然とする西洋の生物学者たちとは、既に出発点から対極的な位置にいたのである。これなら、完全に異質な生物学や進化論が生まれないほうが、かえってふしぎというものであろう。

もうひとつは、ひとつのものから生まれた結果として、相似と相違という一見すると相対立する側面が存在するに至ったと考えていることである。それは、もともと備わった関係なのであり、「子は親に似てゐるといへば何處までも似てゐるけれども、また異なつてゐるといへば何處までも異なつてゐるといへるように、そういつたもの間の関係は、似てゐるのも當然だし、異なつてゐるのもまた當然だといふことになる」(同書, 6ページ)。このふたつの側面のどちらを重視するかによって、相対立すべき理論体系が生まれるのである。ネオ・ダーウィニズムと今西進化論という対極的な進化理論は、まさにその好例であらう。

さらに今西は、これまで本能という言葉で片づけられてきた現象について、次のように述べる。下等な動物や植物であっても、無意識的に行なっているはずの行動は、それぞれきちんと目的に適っているのみならず、ぶつかりあ

うこともなく、終始一貫してひとつの方針に従っている。その裏には、本能という概念では説明し尽くせない、何か重要なものが潜んでいると考えなければならぬ。

それをすなはち生物に具はつた統合性の發現であるといへば、少なくとも本能といつてゐるのよりも進んだ説明に相違なからうが、しかしこの統合性といふものが今度は本能に代つて、われわれの理解の前に立ちふさがる障壁をつくつて了ふのである。だからこの統合性といふものを突き破つても一步奥へ踏み込まなくては、どうしても本質論が完成せぬように思はれるのである。(同書, 71 ページ)

このようにして今西は、生物の意識や主体性や協調性という問題に踏み込んで行くのである。ここでの焦点は、下等な動植物にも例外なく備わつた、合目的的に見える一貫した行動様式はどこから来たのかということであろう。生物が環境にみごとに適応していることは、誰が見てもわかるが、その由来は誰にもわからない。ここに、さまざまな着想の生まれる余地があるわけであるが、ここで問題になるのが、それが偶然の所産なのか否かという、古くからの疑問である。進化論が唱えられて以降も、この論点をめぐって、双方の陣営の間で激しい攻防が繰り広げられてきた。機械論対目的論、あるいは機械論対生氣論の対立ということである。本書のテーマに即して言い表わせば、ダーウィニズムを機械論的に先鋭化させたネオ・ダーウィニズムに対する、主体性を基盤に置いた進化論や生物観ということになる。

その結末はといえば、宗教を背景にした思想体系を別にすると、偶然論ないし機械論という旗印を掲げた陣営が、常に勝利を取めて現在に至っている。^[註1] 目的論や生氣論などの傍流の主張は、一部から一時的に注目されることはあつても、主流になることは決してなかつた。今西の進化論にしても、それを一時にせよ歓呼して迎えたのは、非専門家たちなのであつて、生物学者

[註1] わが国で言えば、たとえば、内山孝一(1928年)、丘英道(1931年)、陶烈(1933年)、米本昌平(2002年、2010年、261-263ページ)らが強い関心を寄せている。

ではなかったのである。

奇妙なことに、化石という動かぬ証拠から導き出された定向進化説も、ほぼ同じ処遇を受けている。ある意味では、超常現象研究と同じ運命を辿っているのである。主流科学者は、宇宙には、したがって生物にも、方向や意志や目的などが内在することはありえないと断定し、それこそが科学的に正しい立場であることを高らかに宣言する。しかしながら、真の意味での科学社会学者のように中立的な立場に立つ者から見れば、その正当性が科学的方法によって実証されているわけではないことがただちにわかる。それ以外の出発点がありえないと、無自覚のまま臆断しているにすぎないからである。にもかかわらず、それを臆面もなく科学的立場と僭称できるからには、何か重大な理由がなければならない。

この、主流科学者が拠って立つ基盤は、その点では宗教と何ら変わるところがない。誰であれ、科学者である前に人間なので、各人の無意識の層に潜む性向に抗うことは、最低でもそれを自覚しない限り不可能であるし、自覚してすらすらわめて難しい。アンリ・ベルクソンは、このあたりの事情を、「精神の機械論的本能は、推論より強力で、直接的観察よりも強力」という言葉で表現している。人間は、意識しないまま「自分の中に形而上学者を宿している」(ベルクソン、2010年、37ページ。傍点=引用者)のである。ここでベルクソンは、私の言う抵抗の重要な側面について語っている。これは、私の言う内心の大きな働きのひとつなのである。この強さは、まさに想像を絶するほどのものと言わなければならない。

[註2] 生氣論と同じく超常現象研究も、教科書に肯定的な形で紹介されたことがないわけではない。夢テレパシー実験(ウルマンら、1987年)で有名なアメリカの精神科医、モンタギュー・ウルマンは、アメリカの代表的な精神医学の教科書に Parapsychology (「超心理学」という章を執筆している(Ullman, 1980)。また、欧米では、心理学や医学の一流専門誌に超常現象研究の論文が時おり掲載される。しかしながら、それが主流になることは決してない。一部の主流生物学者は、わが国にネオ・ダーウィニズムが導入される以前は、今西進化論に席卷されていた、あるいは、今西進化論のおかげで、正統派進化論がわが国へ導入されるのが遅れたと主張するが、それは責任転嫁にすぎない。実際に今西進化論が生物学の教科書に、主流の進化論として掲載されていたことは一度としてなかったからである。

そうすると、この“形而上学者”あるいは内心は、どこから来て何のためにそのようなことをしているのかという、これまでの科学史の中でも最大級の難問が浮かび上がる。この存在は、このうえなく強力な意志のようなものなのであるが、環境や教育という要因によって生後に形成されることを想定する、現行の科学知識の枠内に収まるものなのであろうか。それとも、ベルクソンが“本能”という言葉を使っていることから推定されるように、生まれる以前からなぜか人間の心の奥底に潜んでいるものなのであろうか。

さらには、もしそれが、ヒト以前にまで遡るものであるとすれば、それは遺伝的なものなのか、それとも太古の昔から連綿と続く“心”自体に内在するものなのかという、このうえなく“非科学的”に見える問題とも関係してくる。そして、それが遺伝的なものでなければ、肉体を離れても持続する心の存在を考えなければならなくなるであろう。

この意志がヒトになって初めて出現したものであるとしても、その理由はまちががなく重要であるし、ましてや、それがヒト以前にまで遡るものであるとすれば、それと進化とが関係していないと考えるのは非常に難しいため、その場合には、とてつもなく重要なものとなる。いずれにしても、肉体とは別個に心が存在するとすれば、特に主流科学者にとっては、自らの存在を根底から揺るがしかねない一大事なのである。

加えて、人間の内心は、必ず本人にとっての成功や幸福を否定する方向へ働くので、何が進歩に結びつくのかを正確にとらえ、それを頑強に阻んでい^[註3]ることになる。したがって、このようなものが実在するとすれば、進化を阻

[註3] 「はじめに」で略述しておいたように、幸福否定とは、自らの進歩の指標である幸福感を意識に昇らせないようにするという明確な目的をもって、その方向に進むのを回避させようとする、このうえなく頑強な無意識的な意志なので、それによって作りあげられる症状が出現しやすい方向へ進めば、自らが幸福を素直に感じられるように、つまりは自らが自然に進歩するようになっている。それを積極的に行なおうとするのが、人類特有の修行的行為である。そのため、戦国時代のある武将のように、「願わくば、我に七難八苦を与えたまえ」という祈りや、「主が預言者を通して『わたしはお前の道にいばらをまきちらそう』と言われた」（ヨルゲンセン、1997年、13ページ）、「命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない」（「マタイによる福音書」第7章13-14節）という表現が生まれるのであろう。

害するものでしかないように見える。逆に見れば、進むべき方向を逐一教えてくれているとも言える。いずれにせよ、この問題は、人間の本質や進化の仕組みを明らかにするうえで、最も有力な手がかりになるに違いない。

前章に続いて本章では、主体性や共感性を動物の意識という側面から検討するが、今回はそれを、主として心理学的な角度から眺め、その方向から“人間性”の起源を辿ることにする。

動物の意識の心理学

意識の存在の傍証となるもの

動物には意識がないという“外来”生物学の定説にも、科学的方法によって得られた裏打ちがあるわけではない。その対極に位置するベルクソンは、下等動物ばかりでなく植物にも意識の存在を認めていた。人間と同じような意識ではもちろんないにしても、動きのあるものには、その時々⁴の判断が必要になるため、それなりの意識がなければならぬと考えたのである（ベルクソン、2010年、146ページ）。そうすると、植物でも、オジギソウや一部の食虫植物のように、ふれられたり虫が付着したりすると素早い運動を見せるものにも、何らかの意識があることになる。それに対して、定住生活や寄生生活に入ったフジツボやカイガラムシのように、動物であっても植物のように定住してしまうと、それに伴って意識も眠ると考えた（同書、148ページ）。

この「眠れる意識」という表現とも関係するが、ベルクソンは、物質と意識は共通の源泉から発生したと考える。そして、「地球上の生命の進化全体のなかに、創造的な意識が物質を横断している。〔中略〕それは、工夫と発明とによって、動物のなかに閉じ込められたまま人間においてだけ決定的に現われている何かを解放するための努力」である（ベルクソン、1992年、29ページ）^[註4]というのである。この努力の意志こそが、私の言う本心の中核に当たるとのかもしれない。

その原動力として、生氣論に親近性をもつエラン・ヴィタールという、生

[註4] 本心とは、“内心”とともに私の幸福否定理論の中核的な概念である。これらについては既に4点の拙著（笠原、1998年、2004年、2010年、2016年）で詳述している。

体とは別個の概念を創出したこともあって、ベルクソンの考えかたは、その点でも二元論の範疇に入ると見なされる。これはきわめて重要な問題と言わなければならない。この、二元論をめぐる両者の立場の違いについては、アルフレッド・ウォーレスの主張との関連も含めて、後ほど検討する。

今西は、独自の進化論を唱えるようになってからしばらくは、後に撤回することになる多発突然変異仮説を自説の根幹概念としていた。多発突然変異仮説とは、同じ方向へ向かう突然変異が次々と起こり、それが定向的な進化を引き起こしたとする仮説である。したがって、それは、偶然による結果ではないことになる。その頃の今西は、定向進化という現象の实在を認めながらも、旧来の直進（定向）進化説については、次のように述べていた。直進進化論者は、「環境とか適応とかいったことから超越して生物体内にひそむ、なにかある力、たとえばエラン・ヴィタール（生の躍動）といったようなものを仮定し、この力が進化を一方的に導いてゆくのだ、と考えた」（今西、1970年、181ページ）。

ここで、なぜかベルクソンは直進進化論者とされている。後述するように、ベルクソンが直進進化説を採っていなかったことは、主著『創造的進化』を一読すればすぐにわかる。したがって、今西は、ベルクソンの著作そのものに目を通してはいなかったのであろう。ここで今西が批判しているのは、西田幾多郎の解釈によるエラン・ヴィタール観（大東、1987年、83-84ページ）なのかもしれない。興味深いことに、今西がベルクソンの概念にはっきりとした形で言及したのは、膨大な著作の中でも、なぜかこの一節と、その7段落ほど先の一節の、合計2節のみのようである。これは、進化論をめぐるさまざまな理論や概念に詳細な検討や批判を加えてきた今西としては、異例とも言うべき対応なのではなからうか。^[註5]

ちなみに、ベルクソンの著書の邦訳は、『創造的進化』が最も早く、1913年（早稲田大学出版部）であるが、英語版であれば1911年（MacMillan, Henry Holt & Co.）に出ているので、原著のフランス語版（1907年）でなくとも、かなり以前に読むことができたはずである。ところが、岐阜大学に収蔵されている今西錦司文庫の所蔵目録を調べても、処分されてしまったのでなければ、今西がベルクソンの著作に目を通した形跡はない。